

〈真白き富士の根〉と讃美歌(2)

—— 大和田建樹・三角錫子とキリスト教：小さな教会としての〈ホーム〉 ——

手代木 俊 一

TESHIROGI, Shun'ichi

1) はじめに

2) 大和田建樹とキリスト教

- * 大和田建樹と讃美歌
- * 大和田建樹とカラゾルス
- * 大和田建樹とキリスト教系学校
- * 『明治唱歌』と讃美歌

3) 三角錫子とキリスト教

- * 自伝『涙と汗の記』と著書『婦人生活の創造』
- * 宮内寒彌『七里ヶ浜』と村上尋『真白き富士の根』
- * 《真白き富士の根》と《When we arrive at home》

4) 小さな教会としての〈ホーム〉

- * 〈ホーム〉とは
- * 女性宣教師

5) おわりに

1) はじめに

「〈真白き富士の根〉と讃美歌(1)」では、〈真白き富士の根〉の作曲者がどうしてインガルスではなくガーデンになってしまったかを推論し、〈真白き富士の根〉にいたるまでの歌詞・曲の変遷を追ってみた。本論考では、《夢の外^{ほか}》の作詞者、大和田建樹、〈真白き富士の根〉の作詞者、三角錫子をキリストとの関わりからとらえてみたい。二人共、《夢の外》《真白き富士の根》の原曲《When we arrive at home》ないし《Garden》が讃美歌だったことをも考慮に入れ、それぞれの曲として採用したとも考えられる。大和田建樹・三角錫子とキリスト教の関わりを検証し、この曲が日本にもたらされた意義と、そして、当時のアメリカを現すキーワード〈Home〉をから、日米における〈ホーム〉の違いを考えてみたい。

2) 大和田建樹とキリスト教

* 大和田建樹と讃美歌

《夢の外》の作詞者、大和田建樹は《鉄道唱歌》《故郷の空》等の唱歌作家であるばかりでなく創作の分野では、新体詩、短歌、紀行文、そして欧米の詩の翻訳。研究の分野では、『謡曲通解』等の注釈書、および『和文学史』等、文学史や『日本開闢』等、日本史上の読み物の執筆、そして『日本大辞典』の編纂を行うなど^(注1) 明治時代を語る上で重要な文学者だが、日本の讃美歌史の上でも重要な位置を占めている。

彼は、新潟在住のアメリカン・ボード宣教師、クララ・ブラウンの少年讃美歌集『ゆきびら 少年讃美歌集』（警醒社、明治34年）収録の讃美歌の約半数を翻訳をしている。また、神戸在住のアメリカン・ボード宣教師、A. L. ハウの『幼稚園唱歌』（明治25年）^(注2)、『クリスマス唱歌』（明治27年）^(注3)、『幼稚園唱歌續編』（明治29年）^(注4)の翻訳もしている。当時既に、讃美歌を翻訳できる外国人宣教師、日本人信徒はかなりいたはずである。『ゆきびら 少年讃美歌集』の中には、〈四季の歌〉〈雑歌〉など宗教とは無縁の唱歌があり、これらの唱歌の翻訳を宣教師が大和田建樹に依頼するということは理解できる。しかし、翻訳した曲の中には、《神の御名》《讃美の歌》《神のめぐみ》等、信仰を持たない人間が翻訳することが可能かどうか疑問な讃美歌が多数含まれている。何故大和田建樹に2人の女性宣教師は翻訳を依頼したのであろうか？ 遠距離のハンディはなかったのだろうか？ また大和田建樹はキリスト教とどこでどのように出会ったのであろうか？

* 大和田建樹とカラゾルス

大和田建樹は安政4（1857）年伊予の宇和島の生まれ。慶應元（1865）年、9歳で藩校の明倫館に入学し、明治15年、16歳まで四書五経、小学、古文真宝、和歌、俳句、を学ぶ。明治6年、17歳で國学を独習する。明治9年、20歳で広島外国語学校（明治10年、広島英語学校と改称）に入学、英語を学ぶ。明治12年、23歳の時、病のため帰省する^(注5)。

この広島英語学校在学中に宣教師カラゾルスと出合っている^(注6)。カラゾルスは明治9-10年広島英語学校の教師をしていた。中島耕二氏によれば、この頃大和田建樹は仲間とともにカラゾルスのバイブル・クラスに出席し、《諸人こぞりて》や《あまつみつかいよ》を歌っていたとのことである^(注7)。カラゾルスのバイブル・クラスで《When we arrive at home》ないし《Garden》を歌った可能性もある。当時を振り返って大和田建樹はその著『したわらび』（国文社、明治35年）の「オルガン」で次のように回想している。

オルガン

オルガンというもの。初めて見きゝたりしは廣島にゐたりし頃。亞米利加の教師のもとなりき。水の滴が大洋のなすといふ詩を。ミセス、カロザースが弾きて聞かせしは。面白からざりしにもあらねど。習はゞ教へんといはれしを。さらば願はんといひながら。試験や日課やとおはれつゝ遂に果さず。

今は家にもすゑて。明暮妻や子供弾きならすを。羨ましと思ふごとに。悔しきは二十五年前のおこたりぞかし。(pp.28-29)

大和田建樹はオルガンへの学習意欲を持っていたが、果たせなかったようである。彼にとって〈オルガン〉は西洋文化への憧憬を表していると思われる。『歌まなび』（博文館、明治34年）の序で「人は舊きをいとひ新しきを好む性が故に。籠の鶯といはんより籠のカナリヤといはんこそ面白からめと思ふ」^(注8)と述べている。鶯よりカナリヤ、琴・三味線よりオルガンという時代（明治）に生きたということであろうか？

* 大和田建樹とキリスト教系学校

明治12年、23歳の秋、病氣も快復し上京する。翌年交詢社の書記となり、英語・ドイツ語・ラテン語を学ぶ。明治15年、26歳の春、東京大学の書記になり、明治19年、30歳春、明治17年9月以降就任していた東京大学古典講習科講師を退職。高等師範学校教授に就任。その後、様々な学校に勤務する。明治女学校、立教女学校、静修女学校、青山学院、女子語学校と、早稲田中学校と跡見女学校以外キリスト教系の学校が中心であり、とりわけ女学校で講義を担当する。この間フランス語とロシア語も学習している^(注9)。

すなわちクリスチャン、宣教師が多く存在する環境の中で講義をもっていたということである。

創設期の明治女学校を代表する二人、巖本善次の木村熊二宛明治27年6月21日付書簡^(注10)を見ると、大和田建樹を「クリスチャンにあらず寧ろ神道の熱心家」と書いている。しかし、洗礼は受けなかったが、かなりのキリスト教理解者で、キリスト教に共感するものを持っていたのではなかろうか。次の箇所でも上記のことを感じる。

神の歌

おもへ人、耳にわかれて うまれなん世はいかならん。

もろともに謡ひて謝せよ。世にあまる、あゝ神の恩。

(『明治唱歌』第一集「序に代ふる歌」の一つ)

この歌に上真行が作曲をしており、『明治唱歌』第二集(中央堂、明治21年)に《謡して謝せよ》のタイトルで収録されている^(註11)。筆者には歌詞・曲ともに讃美歌のように思える(譜例)。ちなみに大和田建樹は『ゆきびら 少年讃美歌集』収録の《Rejoice and give thanks》を訳すにあたって、《^{うた}歌えや^{しゃ}謝せよや》というタイトルにしている。

謡ひて謝せよ

(4) ひこのよーのはかなきねがひーう
(5) オモヘヒートミミニワカレチーウ

きーれーづみみを おほふと きーむ
マーレーナ ショハ イカナラ シーモ

ねのひを たれがしづーむーろーけ
ロトモー ニーウタヒテヤセヨーヨ

うーびやーのただかみりうたー
ニ ア マ ル ア ア カ ミ ノ オ シー

謡ひて謝せよ

(1) あさかすーみ またよをのこりさーた
(2) はそふーカーク まかへだのたーち
(3) はそふーカーク まかへだのたーち

にーかーげ のきさびしきそらにーた
そートーホーのきさびしきそらにーた
きーなーご をゆめ にふく らにーた

れかまづ はろをいざなふーふ
きれかまづ はろをいざなふーふ
つさいくましき たただごりのうたー

また、《夢の外》の2番の歌詞にもキリスト教の影響を感じる。ここでの〈我宿〉〈故郷〉とは、〈ホーム〉の翻訳ではあるまいか。あくまで日本的訳語であるが。大和田建樹は《When we arrive at home》の曲ばかりでなく、歌詞も熟知しており、《夢の外》は《When we arrive at home》の日本的翻案ではあるまいか？ なお、《When we arrive at home》とその訳にかんしては「3）三角錫子とキリスト教 * 〈真白き富士の根〉と《When we arrive at home》」で、〈ホーム〉と〈故郷〉については、「4）小さな教会としての〈ホーム〉 * 〈ホーム〉とは」で後述する。

夢の外

(1) むかしの我宿 かはろぬ^{ふるさと}故郷

夢の外に けふぞあへる

日ぐらし秋よぶ 榎の木の木蔭に

おやのゑがほ 見んがためよ

(2) 木のまにみそめし 昨日の故郷^{ふるさと}

今はさめぬ 夢のすみか

富貴もおもはじ 名誉もねがはじ

神のめぐみ ながくとほく (下線筆者)

(3) 雲路にながめし 昨日の我宿

月も風も なれてそでを

うれしさあまりて ねられぬ枕に

ひびくみづの 声もむかし

さて、ここで「*大和田建樹と讃美歌」で問題にした、どうして2人の女性宣教師は大和田建樹に讃美歌の翻訳を依頼したかであるが、大和田建樹は唱歌作家の第一人者で、詩歌の翻訳に秀でていた。その上、キリスト教の環境の中におり、キリスト教の理解者であり、心情的にキリスト教に共感するものを大和田建樹は持っていた。このため、2人の女性宣教師はかれが讃美歌の翻訳には適任と考え、翻訳を依頼したのであろう。

*『明治唱歌』と讃美歌

ここで、《夢の外》が収録されている大和田建樹・奥好義編『明治唱歌』第一集から第六集(中央堂、明治23-25)の内容に簡単に触れたい。まず第一にこの『明治唱歌』は大変バラエティーに富んだ唱歌集であるということが出来る。例えば第一集では、《新年》で始まり、今でも同じ歌詞で歌われる《故郷の空》、そして《天長節》等があり《クリスマスの歌》で終わる。全29曲である。

第一集の序に「巻中に作家者の名ありて作曲者の名のなきものは、西洋大家の歌曲集より撰べるなり」と書かれており、約半数以上、西洋の曲を採用している。すべての曲が判明しているわけではないが、現在でもよく知られている曲を採用している。下記に列挙する。

シューベルトの《菩提樹》が《雀の子》、ワーグナーの《結婚行進曲》が《春の夜》、ヴェルディ『椿姫』の《女心の歌》が《夏の風》、《庭の千草》が《花がたみ》と《共に學びし》、《カッコー》が《水鳥》、《ローレライ》が《二月の海路》と《柳櫻》、《ロング・ロング・アゴー》が《旅の暮》、《リトル・ブラザー》が《命の雨》、モーツァルト《春への憧れ》が《上野の岡》、《アルプス一万尺》で知られる《ヤンキー・ドゥートゥル》が《慈愛の笑顔》、《指の歌》が《箱庭》、《故郷の人々》《スワニー・リバー》が《あはれの少女》、ウェーバー『魔弾の射手』の序曲が《別れの鳥》、ドイツ民謡《まことの愛》が《堇つみ》。

讃美歌からは、《ああ、ベツレヘムよ》（現行『讃美歌』第115番）が《砧の声》、また《旅泊》も《天なる神には》（現行『讃美歌』第114番）とほぼ同曲。これらは奥好義・上真行・辻則承とともに大和田建樹も選曲したと考えられる。また逆に唱歌が讃美歌になった例もある。《哀れの少女》（フォスターの《Old folks at home》、後の《故郷の人々》《スワニー・リバー》）は、讃美歌《エス我を救へり》（『基督教福音唱歌』明治33年）、《はなよりもめでにし》（『讃美歌』明治36年版）になった。唱歌作家大和田建樹と讃美歌委員等との別な関係があるのではなかろうか？

フェリス女学院大学所蔵の『明治唱歌』第一集は1年間で7版を重ね、この曲集はかなり普及したようだ。そして唱歌も一般に普及していく。後日、大和田建樹はそのことを『したわらび』（国文社、明治35年）で次のように述べている。

唱歌

文部省より學制といふもの分たれしは。明治五年なりしと覺ゆ。學課の中に唱歌圖畫などいふ名目のあるを見て。我手習の稽古せし頃は。休みの間にても。畫をかく事さへ自由ならず。まして誰やらが鼻唄うたひたりとて。罰に掃除させられたる事も忘れぬものを。これを學課として習ふとはと。怪しみ思いしが。今は津々浦々山の中の一村里まで。學校あれば必ず君が代はの聲を聞くに至りぬ。花おちて梢あをし。今日も軍歌うたひつゝ行く生徒の一隊。おしたてたる校旗と共に我門を過ぐ。（pp.33-34）

3）三角錫子とキリスト教

* 自伝『涙と汗の記』と著書『婦人生活の創造』^{（注12）}

〈真白き富士の根〉の作詞者・三角錫子は明治5年金沢に生まれる。幼少時代を名古屋・静岡に過ごし、17歳で東京女子高等師範学校に入学した。卒業後札幌女子小学校に奉職。父親が急逝後上京して東京女高師附属小学校、虎ノ門高等女学校で教鞭をとる。様々な労苦故に病に倒れ、湘南の地で10年療養する。その後快復し、明治43年、鎌倉高等女学校の教壇にたち、この時〈真白き富士の根〉が生まれた。大正5年3月まで勤務し、大正5年4月に常磐女学校を創設、初代校長になった。そして大正10年に逝去した。三角錫子は、教壇に立ちながら祖母、母、4人の弟の面倒を見る苦労、悲運と病苦、そして逆境に打ち勝って大正前期の婦人思想界の指導的立場になっていったが、それ以前の鎌倉高等女学校に奉職するまでの半生を『涙と汗の記』に書いている。そしてこの『涙と汗の記』で〈キリスト〉という言葉を持ちいて、また、クリスチャンの表現のしかたで自らの心情を告白している。

恐ろしき人生の旅路の安住の処を得ない位悲しいことがあろうか。病める弟の病院通いのため駿河台に移った時などは、一人の知己もない町で引越荷車を外に待たせて空き家の掃除にかゝり、やっと片附けたときはもう日が暮れて何もする勇氣もない。お蕎麦で御夕飯をすませて睡についたものゝ、二畳、三畳、四畳半という小さい家を見渡し、こんな弱い姉を力にもう安らかな夢を結んでいる弟の寝顔を眺め、氷の様に冷たく堅い胸を抱いて、泣き明かした夏の一夜をどうして忘れる事が出来よう。狐に穴あり、空飛ぶ鳥は巢あり、されど我には枕する所なしといえるキリストの嘆きに比べては、何でもないとはいえ、其の時には身も世もない悲しみであった。(p.233)

また、別な箇所では、

私は弱い人になってしまった。漸く歌をよむ事の多い日が来た。それでも薬瓶をさげて通勤が三年あまりつゞいた。到頭万事を放擲して隠棲むの身とならねばならなくつたのは、二人の弟が大学を出て其の次が高等学校に這入った年であつた。何事も正しい神の摂理であらう。この望みだに叶わぬ命をめさるゝともと神々に祈つた其の祈りはきかれたのだ。(p.286)

さらに、次のように書いている。

こんな醜い拙い自分を許して社会に存在せしめ、かつ願いの総てが聞き入れられた神の御心に感謝せずには居られなかった。(p.247)

『婦人生活の創造』のには以下の表現がある。

昨今デモクラシイといふ言葉は大した流行で、どんな新聞雑誌にも、この文字のないことはありませんが、これは一體どういふ意味なのでせうか。私が初めてこの言葉に接したのは、今から十三年ほど前に、故若松賤子さんの紹介された「小公子」といふ小説でございます。西洋の學問に縁の遠かつた（當時のクリスチャンでなかつた）私は、この時に初めて小公子の口からこの言葉を教へられました。(p.40；ルビ省略)

* 宮内寒彌著『七里ヶ浜』^(注13) と村上尋著『真白き富士の嶺』^(注14)

逗子開成中学のボート遭難事故をテーマにした宮内寒彌著『七里ヶ浜』、また三角錫子の伝

記である村上尋著『真白き富士の嶺 三角錫子の生涯』には〈三角錫子とキリスト教〉について述べられている、あるいは感じさせる箇所がある。

そして、夕方近くになって追悼大法会が滞りなく終了した時、この追悼歌は、喪服姿でオルガンの伴奏を行ないながら合唱を指揮していた三角教諭が、日頃愛唱歌の曲に合わせて作詞した慰霊の歌であったことを、三村教諭から教えられた。その愛唱歌とは、新教聖歌「われ等が家に帰る時」(When we arrive at home 米人ガーデン作曲)で、東京女高師在学中に、官吏であった父親を失ったため、卒業後は俸給が内地より多い北海道の札幌に女子尋常小学校や師範学校訓導の職を求めて、親代りに四人の幼い弟達を養育するのに必要な費用を送金するために、結婚も諦めて自己犠牲の生活に入っていた頃、たまたま日曜礼拝に出かけたプロテスタント教会で、オルガンの伴奏に和して老若男女の信者達が斉唱した聖歌「われ等が家に帰る時」に三角先生は心を打たれた。そのことから、受洗者ではなかったが、以後は折々の心境を、その聖歌の曲に合わせて心の中で歌うことによって、人知れず胸中の悲しみを癒し自らへの励ましとして来た。この原歌は現在では新教聖歌第六二三番(再臨)「いつかは知らねど」となっている。当時は同じ曲を使った大和田建樹作詞の明治唱歌「夢の外」として、女学生間に歌われていたとも伝えられる。

『七里ヶ浜』(p.45)

彼女はこのことから受けた驚きと悲しみを鎮めるためと、遭難した生徒達の残恨の霊を慰める意を込めて、二十代の初めころから愛唱して来た聖歌の曲に合わせて、最後の遺体が新宿浜へ帰って来た一月二十七日の夜、その歌詞の一番から六番までを、「夢の外」を参考にし一晩で書き上げて「七里ヶ浜の哀歌」と題したが、札幌で教会に通うようになった頃から、楽譜とオルガン奏法の勉強を続けて来たので、原曲の基調が伝わって来る慰霊歌になっていた。

『七里ヶ浜』(p.47)

「はい。校長先生もごぞんじかと思いますが、アメリカの作曲家ガードンの曲を使わせてもらおうと思うのです。この曲に合わせて大和田建樹先生が『夢の外』という歌詞を作っておられます。わたくしは、この『夢の外』を参考にいたしました。女学生によく歌われた歌ですから」

『夢の外』は『明治唱歌』に収められている。ガードンの曲は「われ等が家に帰る時」という聖歌に作曲されたものであった。

『真白き富士の嶺』(p.187)

「月謝が払えないからやめます」

という生徒がいたら、錫子はいった。

「あなたが働いているお家に出る女の人の髪の毛を集めていっしょい。それを月謝としていただきます。髪の毛はね、かもし屋さんに売ればいいお金になるのですよ」^(注15)
夜学のほかにも知恵遅れのこのための特別学級も設けた。

人の痛みを黙視できず、弱者へ向ける温かい目をもつ錫子であった。

『真白き富士の嶺』(p.216)

三角錫子と札幌の教会との関係が、『七里ヶ浜』に書かれている。三角錫子は明治22年から30年まで札幌女子尋常高等小学校、明治32年から明治34年まで北海道師範学校訓導、助教諭、小学校乙種検定委員として札幌に在住する。しかし、現在までのところ、教会との関係は明かではない。宮内寒彌の文章からは彼女と教会のことがうかがい知れるが、そのことがまったくの宮内寒彌の創作とは思えない。

『北海道教育雑誌』(明治25年6月)の叙任及就任の欄に、三角錫の名が見られるが、明治25年9月と明治26年1月の『北海道教育雑誌』には、「東京感化院ノ記」を寄稿している。後に『感化事業之発達』を刊行する留岡幸助(上代知新から受洗)が、明治24年北海道空知集治監の教諭師に着任し、北海道の感化事業の関心が高まっていた時期であたる。

三角錫子はこの『北海道教育雑誌』に、明治26年8月「師道論」、明治27年8月「自重論」を展開する他、短歌も度々寄稿している。〈真白き富士の根〉を作詞する礎はこの時期培われたのであろう。

* 〈真白き富士の根〉と讃美歌《When we arrive at home》

さて、ここで〈真白き富士の根〉全文を掲載する。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 一 真白き富士の根 緑の江の島 | 二 ポートは沈みぬ 千尋の海原 |
| 仰ぎ見るも 今は涙 | 風も浪も 小さき腕に |
| 帰らぬ十二の 雄々しきみたまに | 力もつきはて 呼ぶなは父母 |
| 捧げまつる 胸と心 | 恨みは深し 七里が浜辺 |
| 三 み雪は咽びぬ 風さえ騒ぎて | みたまよ何処に 迷いておわすか |
| 月も星も 影をひそめ | 帰れ早く 母の胸に |

四 みそらにかがやく 朝日のみ光
暗にしずむ 親の心

黄金も宝も 何しに集めん
神よ早く 我も召せよ

五 雲間に昇りし 昨日の月影
今は見えぬ 人の姿
悲しさ余りて 寝られぬ枕に
響く波の おとも高し

六 帰らぬ浪路に 友よぶ千鳥に
我もこいし 失せし人よ
尽きせぬ恨に 泣くねは共々
今日もあすも 斯くてとわに

事故の悲惨さ、事故の中での勇気・友情・兄弟愛、わが子を失った親の嘆き、関係者の悲しみがこめられている。四番では、親の悲しみが深いため、もうこの世に生きるすべがないさまを「神よ早く 我も召せよ」と表現している。「神に召される」とはキリスト教の表現である。

ここで、〈真白き富士の根〉の元歌である《When we arrive at home》とその訳詞（大塚野百合訳）を紹介したい。

When we arrive at home

天の故郷に憩う時

1. The Lord into his garden's comes^(註16),
The spices yield their rich perfume,
The lilies grow and thrive ;
Refleshing show'er of grace divine,
From Jesus flow to every vine,
And makes the dead revive.

主が園にきたまうとき、
香木は豊かな薫りをはなち、
百合花は咲きほこります。
主イエスから注ぐ恵みの雨は、
すべての蔓草を潤し、
死にたえているものを甦らせます。

2. O That this dry and barren ground,
In spring of water may abound,
A fruitful foil become ;
The desert blossoms like the rose,
When Jesus conquers all His foes,
And makes His people one.

この渴いた不毛の大地に、
泉が滾々と湧きいで、
実り豊かな土地となりますように、
砂漠が薔薇と咲きにおいますように。
主イエスが敵を皆打ち倒し、
その民を一つとされるときに。

3. Come brethren, you that love the Lord,
Who taste the sweetness of His world,

主を愛する兄弟たちよ、
み言葉の甘味さを味わい、

In Jesus's way's go on ;

Our troubles and our trials here,

Will only make us richer there,

When we arrive at home.

主イエスのみ跡を進みましょう。

この地上において悩み、苦しみが多いほど、

私たちはより豊かになれるのです、

天の故郷（ふるさと）に憩う時。

死と復活、この世の苦難と天国がうたわれている。まさに鎮魂歌である。おそらく、三角錫子は曲ばかりでなく、英語の歌詞も知っていたのではあるまいか。すなわち、《When we arrive at home》の楽譜を持っていたのではないだろうか。〈真白き富士の根〉を作詞するにあたって《When we arrive at home》の歌詞も念頭にあったためこの曲を採用したと考えられないだろうか？ だが、残念ながらそれを示す資料はいまのところ判明していない。勿論宮内寒夜彌が指摘しているように大和田建樹《夢の外》の歌詞の影響は否定出来ない」^(注17)。

4) 小さな教会としての〈ホーム〉

* 〈ホーム〉とは

*Franklin Square Song Collection*の編者はどうして讃美歌《Garden》を曲集に収録するにあたって、《Garden》の初行の《The Lord into his garden's come》ではなく第3節の最後の《When we arrive a home》という箇所をとってタイトルとし、収録したのであるか？ 讃美歌では初行以外の箇所がタイトルになることは希である。編者は〈Home〉という言葉がタイトル中にあることを求めていたと思われる。

*Franklin Square Song Collection*の副題はFavorite Songs und Hymns for School and Homes, Nursery and Firesideである。歌われる場所の一つとして副題に〈ホーム〉があげられている。この〈Home〉とは、ただ単に「家庭」という場所だけを示すものだったのであるか？

また、この時代のアメリカでは、タイトル中に〈Home〉の文字が入る曲が多数生まれる。この*Franklin Square Song Collection*でも、《Home, home, can I forget Thee》《Home of the soul》《Home, sweet home》《Jerusalem, my happy home》《Hearts and homes》《Herdsman's mountain home》《Switzer's song of home》《Love at home》《home again》《Home, fare Thee well》《I see my home in the twilight dim》《Saints' sweet home, Thee》等と枚挙にいとまがない。

そしてこれらの曲が日本語に訳される。または日本の曲に、採用される。中でもオードウェイの《Dreaming of home and mother》の曲を採用した《旅愁》《故郷の廃家》と、

《Home, sweet home》を翻訳した《埴生の宿》は著名である。ちなみに『明治唱歌』の凡例では歌われる場所として学校と家庭が想定されていた。

さて、なぜこのように、19世紀アメリカでは〈Home〉が頻繁に現れてくるのであろうか？

当時アメリカ都市部では工業化と商業化が進み、〈ホーム〉と〈ワーク〉の場所が分離して行く。〈ホーム〉は家族だけのプライベートな場所になっていった。ここで男性は外〈パブリック〉〈ワーク〉〈世俗〉、女性は内〈プライベート〉〈ホーム〉〈敬虔・モラル〉という関係が確立し、女性が家庭〈ホーム〉の中心となった。そして子育ては勿論であるが、料理・裁縫の技術者であるとともに道徳的指導者としての地位を高めていった^(注18)。この時代、女性雑誌もはじめて登場する。[*Women's Home Companion* (1873)、*Women's Home Journal* (1878)、*Ladies Home Journal* (1878)、*Good Housekeeping* (1885)。女性雑誌におけるキーワードも主に〈ホーム〉である。

人が還っていくところ〈ホーム〉＝〈家庭〉〈わが家〉、〈故郷〉〈本国〉であることは言うまでもないが、人の魂が還っていくところ〈天の故郷〉。そして、女性が倫理・道徳を司る場所、魂の安らぎの場所としての〈ホーム〉。ここでの倫理・道徳とは勿論キリスト教に根ざすものである。これには、ピューリタンの伝統、小さな教会としての〈ホーム〉^(注19) という意識も流れていた。すなわち、キリストを中心とした最小の集まりである。

* 女性宣教師

明治期、当時アメリカの〈ホーム〉を担っていた中流階級の女性が宣教師として来日した。彼女達は伝道所を開くにあたって、神戸ホーム（神戸女学院の前身）やミッション・ホーム（横浜共立学園の前身）と名付けた。そして、まさに女性宣教師が日本に伝えようとしたのがこの日本におけるクリスチャン〈ホーム〉であったといって過言ではない。安部純子氏は、ミッション・ホームについて次のように述べている。「ホームは、三人の宣教師を母親とする、『聖書を基本にした、真の家族の愛情と優しさに満ちた平和なホーム』（ピアソン）であった」^(注20)。キリストと同じ心を持つ人々の場所であり、Joyもtroubleも分かち合う場所であり、家族以外の人を招いても家族同様になれる場所である^(注21)。そして、独身女性（クロスビー）でも未亡人（プライン、ピアソン）であっても〈ホーム〉の中心、母親なのである。

また、来日した女性宣教師が女性としての自己を主張する場合、〈ホーム〉は大変有効の手段であった。小桧山ルイ氏は、その著『アメリカ婦人宣教師』で、看護学校を開こうとするツルについて次のようにのべている。「まず規模の小さな『ホーム』——つまり女性の牙城——のイメージに看護学校を引き寄せることで、女性がこれを運営することの正当化を狙っていた」^(注22)、「一九世紀のアメリカで女性が自我を通すとすれば、『ホーム』と『神』を持ち出す以外

なかったのである」^(注23)。1874年、The national Woman's Christian Temperance Union (WCTU)が設立されるが、そのスローガンは、For God, Home, and Native Landであった^(注24)。〈ホーム〉は19世紀アメリカを表す重要なキーワードといえる。

一方彼女達を受け入れた日本人の印象はどうだったのでしょうか？ 献身、謙虚、自立、自己への厳格さ、他への思いやりを女性宣教師に感じていたようである^(注25)。

この、献身、謙虚、自立、自己への厳格さを自らに課し、思いやりがあり、知性と教養にあふれる女性として描かれるのが三角錫子である。『七里が浜の哀歌』も『真白き富士の根』もこのことが基調となっている。すなわち、4人の弟、母、祖母への自己犠牲、女性としての自立、自分を厳しく見つめ、逆境に打ち勝ち、まわりへの温かい目を持つ、モダンな賢婦人として描かれている。誤解を恐れず申し述べれば、私は三角錫子に女性宣教師が伝えようとした〈ホーム〉の結実を見るのである。

三角錫子はその著『女性生活の創造』で、女性の自立と家庭での役割を展開しているが、章のタイトルからもそのことがうかがえる。「デモクラシイの思想を日本の家庭にも入れたい」「家族會議を開け」。

この『女性生活の創造』で次のように述べている。

何事も「あなた、あなた」で、良人のみを頼りにしてゐる日本婦人は、その人格を認められ、意志を尊重せられて、デモクラチックに家政を取って行くことができるでせうか。
(p.42；ルビ省略 以下同様)

母は靈魂の教育者であらねばといふ事をしみじみと思うのでございます。

ルーバン大學教授オーブル博士の言として最近讀みましたもの、中に、「眞の教育者は教育學よりも教育を、理論よりも實際を、學校よりも家庭を、教師よりも母を、統一よりも自由を、國家民族よりも人間を、智よりも情を科學よりも良心をおもんずる。」

この言葉の内にある理論よりも實際をといふ其の實際、統一よりも自由をといふ其の自由、國家民族よりも人間をといふ其の人間、智よりも情をいふ其の情、科學よりも良心といふ其の良心、これは皆家庭で母が育むべきものでございます。(p.59)

ぽつぽつ出来始める女學校は、良妻賢母主義となり、可からず訓をふりかざし、極端に抑へつけられたものです。(p.54)

二十歳になつたから急いで嫁がねばならぬといふ事がないと同じく、四十歳になつて結婚

して悪いといふ事もなく、獨身の人が不幸で、結婚した人が皆幸福だとばかりも思つてゐない。誰でも教育期に於て充分に勉強し、眞に愛するひとを見出す迄は、自立し得る力を養つて、凡てをごく自由に考へて始めて結婚の幸福も自由も得られるのであらうと思つてゐます。(p.80)

兎に角現今の様に、職業が結婚失敗者の逃避所であり、結婚が長い獨身者の隠棲所であるやうな社會は、不健全な社會である。政治が眞に國利民福を主とし、社會の道德が眞に人をして其の處を得しめ、おのおの其生を樂しむに到り、人々は自由に其の個性を發揮して、各志す處に、自分の生命を見出して行く様になれば、立派な獨身婦人も輩出して活動する様にならうと思ふ。(p.118)

婦人といふものは男子と對等のものである事を理解し、自分と同じ階段まで導きあげて下さる事を私はその良人に希ふのである。(p.129)

謙虚さも忘れていない。

私は現代婦人の内面生活はかうであるとか、或は斯うあらねばならぬとかいふことを皆様の前に申のべる資格はない、私は内面的にも外面的にも、それはそれは貧しい人間である、この年齢になつてなほ自己を知り、自己を統御する力すらないので、己を省みる疚しさと、徑て來た失敗の過去からうけた痛手に思ひ悩んでゐる程のものである、そんなに不完全な自己の持主である丈、いろいろ思ひが多い、宗教も哲學もない私がそれを思ふやうに、皆様の御胸にふれるやうに申しのべる事は出来ません。只私も現代人であり、其自分のすべてをこゝにお話し申したら、幾分共鳴して頂けることもありませうかと思ふのみです。(p.2 ; 出だしの部分)

三角錫子は若くして離婚、その後獨身をとおしたが、教師としての彼女を表するときも、〈ホーム〉を代表するひととして描かれているように思える。まさに安部純子氏が指摘するミッシェン・ホーム、「眞の家族の愛情と優しさにに満ちた場所。キリストと同じ心を持つ人々の場所であり、Joyもtroubleも分かち合う場所であり、家族以外の人を招いても家族同様にされる場所」の代表者として描かれている。

三角先生から私たちは数学を教わりました。胸を患って保養にこられた方のようにとはとて

も思えない感じの、綺麗な方で、時には軽い冗談もいわれました。逗子からお通いで、逗子開成の男の子たちを弟のように可愛がっておられたようで、あの歌をつくられるようになったのではないのでしょうか。

『鎌倉そして鎌女』^(注26)

今でも私の脳裏に御ざいますのは稀にみる賢婦人でいらつしやいましたが、一面には本当におやさしいお母様という親しみのある感じでございました。そして常に先生の教えの中に「みなさんは社会に出て常識のある人間になって下さい」と仰つて御いででございました。

『初代校長三角錫子先生を偲びて』^(注27)

当時鎌倉高等女学校の四年生だった私は、ほがらかでスマート、折目正しく几帳面な三角先生に憧れたものでした。教育熱心でモダンな美しい先生でした。－中略－当日先生はオルガンをひき、私たちが歌ったのですが、途中から声がどうしてもしゃくりあげて、満足に歌えませんでした。それを三角先生は、後からなぜもう少し、しっかりと歌わないかと私たちに注意されました。こんなところが先生の折目正しいところでした。

『真白き富士の嶺』（鎌倉開成会、昭和39）^(注28)

家族の目からみると。

父が早死して姉が一家の柱となって働き、過労で身体をわるくし、逗子にいえをたてて住んでいたのです。－中略－

私が月謝、当時二十五銭だったのですが、それを落としたときは、ものすごく叱られました。きちんとしている姉だけに、不注意な行為が大嫌いで、それで私をこっぴどくやられたのだと思っています。しかし、やさしい姉でした。

『真白き富士の嶺』（鎌倉開成会、昭和39）^(注29)

ここまで三角錫子と女性宣教師が伝えようとした〈ホーム〉を展開してきたが、讃美歌、音楽を問題にすると、女性、女性宣教師がこの分野に及ぼした影響についても考えなければならない。男性の宣教師が聖書翻訳や、神学教育をその領域としていったのに対し、女性宣教師はクリスチャン・ホームのあるべき姿を育児等、実際女性が担うことをとおして、具体的にあらわそうしていった。ヘボン青年男子に讃美歌を教えようとして挫折・絶望し歌を教えることをやめてしまうが、女性宣教師は子供に忍耐強く教え、讃美歌指導に成功するのである。礼拝でも、牧師たる男性が説教をし、婦人が讃美歌のオルガン伴奏する。日曜学校で子供に歌を

教えるのも牧師婦人である。楽器の手習いも日本では伝統的にも女性の領域であった。

大和田建樹も女性の理解者だった。『明治文学史』では、次の様に書かれている^(注30)。

女は男と等しく神聖なる人類としての権利を有す。是まで女子の男子に壓制せられたる天理に非ずして事實なり。男子豈女子よりも多くの権利を有すべき理あらんやと是ぞ其論者が唱ふところなりしは讀者も記憶するならん是等の空論果して文學に影響せしところ如何なりしか。残念にも文學は是が為め何の助をも蒙らざりしなり。

また、『明治唱歌』で大和田建樹は、《あはれの少女》《花の少女》など女性をテーマにした唱歌を作詞している。歴史的な〈紫式部〉〈清少納言〉等が歌われることはあったが、これはそれまでに例のないことである。

愛と自己犠牲、自立、教養と家庭の守護神としての女性、これらは女性宣教師が伝えようとしたキリスト教の精神である。しかし、日本では、お互いの人格を尊重し、尊敬しあう夫婦を単位とする家庭は受け入れられず、〈家〉はそのまま残り、女性は良妻賢母という役割を担わされた。小檜山ルイ氏は次のように述べている^(注31)。

良妻賢母に基づく女子教育とは、「人を治るの学才を養うに在らずして、実に人に治めらるる淑徳を養う」（深谷、1966年、122ページ）ことを目的としたのである。このように、キリスト教が国家と「修身」に、「ホーム」が「家」に置きかえられ、アメリカ的ウーマンフッドが「良妻賢母」となり、「共和国の母」が「軍国の母」へと変容する時、特に先鋭的な少数の人々をのぞき、一般の女性が大挙して主体的、攻撃的に社会参加する可能性の芽はほとんど摘まれたといえる。

アメリカ女性宣教師は、小檜山ルイ氏によれば「強大なエネルギーを持った聖なる戦士」^(注32)であったが、キリストを中心とした〈小さな教会〉＝〈ホーム〉は日本にはストレートには伝わらず、日本では〈わが家〉だけの意味になり、その〈わが家〉もアメリカの家庭への憧れを残すものになってしまった。戦前「鬼畜米英」と言いながら、戦後米国礼賛にすぐ変じるのもこの憧れが底辺にあったためであろう^(注33)。すなわちその憧れとは、大きな洋館、広い芝生の庭、ペットがいて、ゆったりとしたベッドルーム、ピアノがあり、暖炉の燃えているパーラー、オーブンで調理された料理を家族とともに食べることである。しかし、アメリカでは食事と就寝の前には神に祈り、日曜日には家族揃って教会にいったのだった。そのことは考えず、憧れだけがのこった。様式は受容しようとしたが、その様式を生んだキリスト教精神

を受け入れようとしなかった。三角錫子のようなケースはごくわずかである。

宣教師が伝えようとした〈ホーム〉は日本では違ったものになってしまった。〈Home〉を〈我家〉とだけ訳したときにキリストを中心とした小さな集まり＝小さな教会としての〈ホーム〉の意味は日本では失われてしまった。このことが、〈真白き富士の根〉の原曲が《When we arrive at home》であると早くから判っていながら、この〈Home〉の意味が理解されず、この曲のタイトルから讃美歌であるとはまったく思わなかった遠因であろう。このため作曲者がガーデンであるという誤解が長い間続いてしまった。

5) おわりに

〈真白き富士の根〉をめぐる問題をキリスト教とからめて推論をすすめてきた。特に《When we arrive at home》の〈Home〉の日米の違いから、日本の近代史における宣教師の影響を検証する必要性を感じたが、現段階では推論の域を出ていない。本論考もエッセイ風になってしまった。今後は実証的に日本近代史における宣教師の役割をあとづけていきたいと考えている。

この間感じたことであるが、大和田建樹は明治を代表する偉大な文学者である。しかし、あまり研究されているとはいえない。今後の研究が待たれる^(注34)。

〈真白き富士の根〉＝《Garden》の曲は、は韓国では唱歌^(注35)、中国では讃美歌^(注36)になっている。アメリカとアジア、アジア諸国での交流を見直す上で、アジアにおける洋楽の比較研究も必要であろう。このことで相互理解が深まるばかりでなく、自らの置かれている立場も判ってくるのではなかろうか？

「〈真白き富士の根〉と讃美歌」(1)と(2)を書くにあたって様々な方々のご教示を賜った。特にお世話になった方々のお名前を記して感謝の意を表したい。アメリカから資料・情報を送って下さったヴァンダイク女史 (AMERICAN DICTIONARY OF HYMNOLOGY)、クロッコ博士、《When we arrive at home》を翻訳して下さった大塚野百合氏 (昭和女子大学)、東海林典子氏 (トキワ松学園)、肥後文子氏 (逗子開成学園)、石川祐司氏 (読売新聞神奈川支局)、前川公美夫氏 (北海道新聞社)、クリストファ・N. 野澤氏 (洋楽史研究者・SPレコード収集家)、安部純子氏・中島耕二氏・松下孝氏 (キリスト教史学会)、小檜山ルイ氏 (東京女子大学)、安田寛氏 (山口芸術短期大学)、鈴江英一・福島恒男氏 (北海道キリスト教史)、寺田芳徳氏・高橋俊昭氏 (英学史学会)、仲万美子氏 (日本音楽学会)、張前氏 (北京中央音楽院)、韓国の閔庚燦氏 (国立韓国芸術総合学校韓国芸術研究所)、戸田志香氏 (霊南坂教会)、梅田利春氏 (国立音楽大学図書館)、北海道大学図書館、安部清哉氏 (フェリス女学院大学文学部日本文学科)、そして、津田みゆき氏・鈴木祥子氏 (フェリス女学院大学図書館山手別館)。

- (注1) 大和田建樹著『蘆船日記 附蔵ごもり』(福島四郎編、1910〔明治43〕年9月)附録「大和田建樹先生年表」による。
- (注2) 『幼稚園唱歌』大阪 今村謙吉、1892〔明治25〕年5月。
- (注3) 『クリスマス唱歌』大阪 今村謙吉、1894〔明治27〕年12月。
- (注4) 『幼稚園唱歌續編』大阪 今村謙吉、1896〔明治29〕年4月。
- (注5) 前掲書(1)。
- (注6) 寺田芳徳著「広島英学校と宇和島」『英学史研究』第12号(日本英学史学会、1979〔昭和54〕年9月)。
- (注7) 日本のキリスト教史研究者、中島耕二氏の私信による。
- (注8) 大和田建樹著『歌まなび』(博文館、1901〔明治34〕年4月)、p.1。
- (注9) 前掲書(1)。
- (注10) 青山なお著『明治女学校の研究 青山なお著作集第二巻』(慶應通信、1982〔昭和57〕年4月)、p.508。
- (注11) この歌詞は第5にあたる。
- (注12) 三角錫子著『婦人生活の創造』(實業之日本社、1920〔大正10〕年11月)。「涙と汗の記」は『婦人生活の創造』の附録(pp.220-250)、「涙と汗の記」の初出は『婦人世界』(1920〔大正9〕年4月号)。
- (注13) 宮内寒彌著『七里ヶ浜』新潮社、1978〔昭和53〕年1月。
- (注14) 村上尋著『真白き富士の嶺』ドメス出版、1992〔平成4〕年5月。
- (注15) 『婦人生活の創造』には、髪を売って夫の酒代にする話、妻の協力で夫が酒をやめる話が登場する。アメリカの矯風事業の影響であろう。
- (注16) 《Garden》では、comeである。《Garden》から《When we arrive at home》になった時に多少の歌詞の変更がある。第1節 which - And、第2節 as - like、第3節 ye - you、the - His。
- (注17) 前掲書(13)、pp.174-176。
- (注18) Evans, Sara M., *Born for liberty* (New York: The Free Press, 1989), pp.68-69, 88-89, 100-101, 138.
- (注19) Campbell, Donald P., *Puritan belief and musical practices in the sixteenth, seventeenth and eighteenth centuries* (Ann Arbor: U.M.I., 1994; Thesis[D.M.A.] - Southern Baptist Theological Seminary, 1994), pp.400-402.
- (注20) 安部純子著「女性宣教師と近代女子教育」(『異文化交流と近代化 京都国際セミナー1996』で配布された発表原稿)。
- (注21) 安部純子氏の私信による。〈Home〉に関する、宣教師 Miss Mary Ballantyne の見解。
- (注22) 小檜山ルイ著『アメリカ婦人宣教師』(東京大学出版会、1992〔平成4〕年6月)、p.222。
- (注23) 前掲書、p.223。
- (注24) 前掲書(18)、p.127。
- (注25) Pierson L. H., *A quarter of a century in the island empire or the progress of a mission in Japan*, pp.114-115. “A happy reunion” 他、安部純子氏のご教示による

(注26) 『鎌倉そして鎌女』(鎌倉女学院、1981 [昭和56] 年9月)、p.74。

(注27) 『初代校長三角錫子を偲びて』(トキワ松学園、1961 [昭和36] 年11月)、p.16。

(注28) 『真白き富士の嶺』(鎌倉開成会、1964 [昭和39] 年5月)、p.58。

(注29) 前掲書、p.59、弟三角武夫氏の談。

(注30) 大和田建樹著『明治文学史』(博文館、1894 [明治27] 年10月)、pp.83-84。

(注31) 前掲書(22)、pp.288-289。

(注32) 前掲書(22)、p.265。

(注33) 亀井俊介氏は『アメリカの心 日本の心』(講談社、1986 [昭和61])、p.168で次のように述べている。「明治以来、日本の近代化はなんといっても西洋化であった。その西洋化は多岐にわたる。文化の諸文やにおいて、さまざまな西洋諸国に手本が求められ、されがさまざまな形で導入されてきた。だが風俗習慣を含んで、日常の生活という文化の底辺に目をむけるなら、西洋化とははなはだしくアメリカ化ではなかっただろうか。少なくとも第一次大戦後はその傾向が強く、第二次大戦後はほとんど決定的にそうである。ところが、同時に、この日本人が最も強く軽蔑し、批判し、抵抗してきているのもアメリカ文化であり、日本文化のアメリカ化ではないだろうか。」

(注34) *『蘆船日記 附繭ごもり』福島四郎編、1910 [明治43] 年9月。

*「大和田建樹」『近代文学研究叢書11』昭和女子大近代文学研究室、1959 [昭和34] 年1月。

*矢野ふみ著「大和田建樹」『文学遺跡巡禮・日本文学編第百回』、『学苑』13-11、1951 [昭和26] 年。

*岡本昌夫著「明治翻訳史の一断面——大和田建樹の中心として——」『比較文学』第4巻(日本比較文学会、1961 [昭和36] 年)。

*佐藤勇夫著「大和田建樹と『欧米名家詩集』」『英学史研究』第23号(日本英学史学会、1990 [平成2] 年10月)。

*瀧田佳子著「あはれの少女 大和田建樹と『明治唱歌』」『近代日本の翻訳文化叢書 比較文学比較文化3』中央公論社、1994 [平成6] 年1月。

最近は英学史、比較文学比較文化からの研究が僅かにあるだけである。活発な研究、またそのためにも全集の刊行がまたれる

(注35) 韓国の閔庚燦氏(国立韓国芸術総合学校韓国芸術研究所)、戸田志香氏(霊南坂教会)のご教示による。

(注36) 張前氏(北京中央音楽院)の私信によれば、中国の唱歌にはなっていないということでした。《齊來歌唱基督德行》の初行で、『頌主聖歌』(上海：中華内地會、1941)に収録されている。